

---

# ひいらぎに雪が積もる時に

台風X号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひいらぎに雪が積もる時に

### 【コード】

N5886S

### 【作者名】

台風X号

### 【あらすじ】

自然がお怒りになる頃にシリーズ第六弾。自然の思惑とは逆に人間の動きも気になり始める。

## 語り 第一話 柊

1月23日の朝。平手町の嘆きの壁が崩れた。

死神の少女は、寒冷低気圧に言った。

「刻む時計が動き出しました。」

「そうですか、いよいよですね。」

「はい、この街の悲劇が紡がれる。」

昼ごろになり、みんなが外へ出た。

「兄ちゃん、おかしいよやっぱり雪が降ってないなんて。」

金谷田老司は、雪が降っていないことに疑問を浮かべていた。

「しょうがないけどほかの場所では降っているみたいだね。」

光泰資は少し嬉しい気持であった。

大千と三音は、柊の木を見ていた。

「少しだけ、雪をかぶっている・・・なぜだろう。」

「夜も晴れていたのにね。」

「三音ちゃんの言うとおりだしな。なんか怖い。」

蟹村嘉香が大千と三音を見つけた。

「大千君と三音ちゃんじゃない。こんにちは」

「こんにちはは、嘉香ねえさん。」

「三音ちゃん元気だった？」

「元気だよ。ウヨー！」

「三音ちゃん、その口癖をするとお兄ちゃんのくすぐり攻撃がくるって分かっていたのに。いまその口癖をしたなくすぐり攻撃だ覚悟しろ！」

「お兄ちゃんから逃げろー！」

「待てー！」

その夜、一人の青年が歩いていた。

名前は、園浦一四である。

「今日は、遅くなった。早く帰って寝ようかな。」

その時、童謡の雪が聞こえた。

「雪やこんこ霰やこんこ降っても降っても……」

園浦一四は、その歌に反応してしまった。

一四は、近くにある鉄の棒を持っていた。

彼女は、老司のおさなじみである。日山ひやま晁あき小こである。

彼女の家にこっそり侵入した一四は、その女の子の部屋に入った。

一四は、しばらくして目を覚ました。

そこは、自分の家であった。

手を見た一四は驚いた。

「なっ、俺の手に血が付いている！それに鉄の棒まで……」

一四は、かなりおびえていた。

「なにがあつたんだ。俺の身に……」

錯乱している一四はこの夜眠ることができなかった。

死神の少女は、一四のことを黒影と呼んだ。

語り 第一話 柊（後書き）

次回 語り 第二話 もうすぐあの世。お楽しみに！いきなり恐怖のストーリー―炸裂なのです。

## 語り 第二話 もつすぐあの世

晁子が殺されたことをみんなは知っていたが気にしていなかった。

金谷田5兄弟は、その点を少し気にしていた。

「どうして、人が死んだのに気にしていないのだろう。ひどすぎねえのか。」

老司は、ぶつぶつ言いながら兄の大千について行った。

大千は、蟹村と会話をしていた。

「晁子の死、私達つてそこに疎いのかしら？」

「本当は知っているだろう。晁子ちゃんの死に様！教えてよ！頼むから。」

「ごめんなさい！教えてはいけないことになっているの町の条例だから。」

「なつ、町の条例だと。」

平手町の条例に従う、住民たち。どうしてこんなことが実現してしまったのかと焦りの表情でパニックを起こしていた。

そんな中、死神の少女は、自然の鉄槌をこの街に落とすことに躊躇いなく行動に移っていた。

「これで、欲望に落ちて行った人間への裁きができますわ。」

寒冷低気圧は、死神の少女に任していた。

町の条例という納得いかない大千と老司。

その日の夜、ヒサトは死神の少女を見かけた。

「何なの？」



語り 第二話 もつすぐあの世（後書き）

次回 語り 第三話 行方のない弟。お楽しみに！

### 語り 第三話 行方のない弟

ヒサトは死神の少女と目を合わせた。

「何なの？」

「私は自然の使徒の者でございます。」

「自然の使徒？」

「神に近い存在でもありません。」

「神ね、私はそんなものを信じていない。というよりあなたは何が目的？」

死神の少女は、微笑んでこう言った。

「あなたの弟を攫わせてもらいます。」

それを言った後、ヒサトは死神の少女を襲おうとしたが頭を天井にぶつけられて気絶してしまった。

「大したことはないこと。さて、狩りますか。」

死神の少女は、弟を連れさらった。

翌日の朝、ヒサトはゆうべの記憶が無くなっていた。

大千と光泰資は、ヒサトと話していた。

「ところで姉さん。弟はどうした？」

「寝ているんじゃないの？」

「それが、今日になっていないんだよな。」

「そんな、どこにいるのかしら・・・」

彼等も死神の少女の存在を知らなかった。

こうしている間に町の職員あのみねとねかすの一人、青満登根和が殺された。

胸に大きな穴がくつきりと見えていた。

語り 第三話 行方のない弟（後書き）

次回 第四話 町からの脱出は不可能！。お楽しみに！

## 語り 第四話 町からの脱出は不可能！

「職員の一人を殺れとは、命令した覚えは。」

死神の少女は、寒冷低気圧に言った。

「黒影の可能性ありますね。」

「えっ、これまでも。」

「そういうことですな、自然は簡単に人を殺めるほどの力を持つてはいますが下手に使うと自らの身関わることなので、あまりしません。」

「そうなの。黒影の正体を暴こう。」

「それにしても、謎ですね。こういうときは吹雪を使うしかありませんね。この町から住民を出られなくするため。」

寒冷低気圧は、温帯低気圧を呼び出した。

「吹雪を起こしてくれませんか。温帯低気圧郷。」

「承知した。」

温帯低気圧が左手を空に掲げると雲ができて、雪が舞い始めた。

そして、吹雪と化した。

「さあ、町から脱出は不可能。錯乱する明日へ誘われなさい。」

語り 第四話 町からの脱出は不可能！（後書き）

次回 語り第五話終わりゆく、町の狂気。お楽しみに！

## 語り 第五話 終わりゆく、町の狂気

町は突然白い世界に変わり始めていた。

吹雪は最悪な事態を引き起こし始めた。

それは、町を埋め尽くすのに至った。

翌日

大千達は、雪の重みに耐えていなかった家の下敷きになっていた。

町は壊滅状態に陥り、突如襲った大災害として注目を浴びていた。

ひいらぎに雪が積もる時に、自然の使徒たちの猛威で真実を打ち消され途方に暮れるのも更なる理解が難しくされた。

この謎を解き惨劇の回避をすることができるのは誰か？

そして黒影のさらなる黒幕は誰なのか？



語り 第五話 終わりゆく、町の狂気（後書き）

次回 追記第一話暇な方がいい。お楽しみに！

## 追記 第一話 暇な方がいい

大千と嘉香は体育館のステージでくつろいでいた。

「次の授業の準備どうしようかな？」

「移動しなきゃいけないからね。」

「そうか、次、移動授業だから。」

「急いで教室を戻って、筆記用具と教科書を持っていかなきゃ。」

「そうだね。」

茶柱九郎は、人間に化けた寒冷低気圧と話し合っていた。

「寒倉さん、君の言うことは一理ありますが・・・」

「この町の条例ならば、いた仕方ないですよ。」

「君の言うことを町の条例で明かしてはいけない真実を禁ず。というのには理由はなくてですね。」

「理由なき縛りは、私たちにも困ることです。理由があつて縛るのなら、私たちには理解できます。」

寒倉（寒冷低気圧）は、再び問いかけた。

「そう言われましても、困りましたな。」

寒冷低気圧は心でこっと思った。

(愛を持たぬ人の子よ、すぐに死に誘ってあげよう。)

追記 第一話 暇な方がいい(後書き)

次回 追記第二話関係のないこと。お楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5886s/>

---

ひいらぎに雪が積もる時に

2011年10月9日22時53分発行